

震災支援シンポジウム 講演・報告の内容

若者、女性に選ばれた女川町に

◆須田善明・女川町長 「女川町の今」

女川町は仙台の東北、60kmにあり、牡鹿半島に位置します。水産業がメインの美しい港町でした。2011年（平成23年）3月11日、東北大震災で、高さ30メートルの大津波に襲われ、壊滅状態に。町の人口10014人のうち、827人が亡くなり、住宅など6511棟のうち、4316棟が壊れました。被災率は全国一です。これは1000年に一度の災害で、1000年に一度の街づくりです。住宅を造ることが復興ではない。街に暮らす人々、訪れる人々の生き生きした姿があってこそ、本当の復興だと思います。今年3月にJR女川駅が完成します。駅の半径300m以内に、病院、学校、商店、水産工場などを集めます。機能性、利便性の高いコンパクトシティを目指しています。

50トンダンプなど超大型重機で、山を削り、高台に住宅団地を造成、30区画が完成。今、8割が住宅を建設中です。しかし、復興事業の着手率は90%、出来高は25%にとどまります。地方に「消滅都市」が激増するといわれます。都市部への人口流出と少子化のためです。女川町は何をするか。推薦、公募でワーキンググループを結成、住民が町政に直接参加しています。生産手段、施設の共有化で水産業などの復活を図っています。しかし、震災後、町民2000人が石巻市などに引っ越しました。女川町が存続する為に、新しい価値を付加し、女川町だから出来ることを成し遂げ、「女性、若者が選ぶ女川町」に全力をつくします。 * 宮城県議3期を経て2011年11月、40歳で女川町長に当選。

◆金川章三氏 「阪神大震災 あの時カレッジ生は」

1995年（平成7年）1月17日早朝、激しい縦揺れにとびおきました。テレビで見る神戸の街は無数の住宅が倒壊、その上、猛烈な火災で焦土になりました。電気、ガス、水道はストップ。惨状が明らかになるにつれ、焦燥感にかられました。

カレッジからボランティア活動に参加しないかと誘いがあり、翌日から参加。しあわせの村の温泉が無料開放されたので、その整理に回りました。2月初旬の小雪が舞う朝、10時開放なのに、7時から順番を待つ列が膨れ上がりました。「もう少し、待ってね」と声をかけると「お互い、ご苦労様」ということばが返り、日本人は捨てたものでないと感じました。その後、仮設住宅のお世話もしました。 * 国際コース1期生。北区在住。

◆渡辺由和氏 「グループ〈わ〉誕生への道のり」

震災の年の4月カレッジに着任、「卒業生はその後何をするのか」という疑問がわきました。「地域に帰り、地域のために働く」が建学の理念ですが、「今さら街のおっさんになれない」という人がたくさんいました。カレッジに居場所を作ればいい。ボランティアグループ、クラブは卒業生は参加できません。ボランティアセンターはあるけれど、うまく機能していない。ルール作りが必要でした。卒業した1期生と〈わ〉設立準備委員会を結成。7コース・専攻の代表と討議を繰り返し、1997年7月22日に設立できました。

* シルバーカレッジ事務局元課長。〈わ〉の誕生に奔走。

◆吾郷信幸氏 「神戸だからできる支援活動」

こうべ市民福祉振興協会は毎年、東北に支援チームを送っています。〈わ〉とも協力しています。震災直後には募金3700万円、応援メッセージ1万通を届け、昨年夏、女川町の仮設住宅に月下美人を贈りました。帰神後、仮設から「見事に咲いたよ」と写真を添えた手紙が届き、心底、うれしくなりました。

ことは協会職員が手作りの新年スマイルカードを送りました。「東北、忘れていないよ」のメッセージです。元気で希望が持てるよう、東北支援を続けます。

* こうべ市民福祉振興協会専務理事。東北支援隊に2回参加。

◆波多野武郎氏・橋野美子氏 「笑顔の交流楽しく」

小学校や保育所の子どもたちはハイタッチ、満面の笑顔で迎えてくれました。昔あそび、マジックで時を忘れました。90歳女性の「主人の遺骨を残して逃げ出してしまった。おじいさんに申し訳ない。今も死んでしまいたい思い」ということばに胸をつかれました。

水餃子、たこやきを「おいしい、おいしい」と食べてくださり、多くの方が「こんなに笑ったのは久しぶり」にはスタッフ一同、本当にうれしくなりました。

* 〈わ〉東北プロジェクトチーム

◆金芳外城雄氏 「巨大災害に備え 私達にできること」

地震は予知できない。だからこそ、今、備える必要がある。昨年11月の長野北部地震の死者はゼロ。奇跡といわれました。住民が結束し、互いに救助したからだそうです。

今、日本ではつながりの輪が消えつつあります。このままでは、長寿社会は消えてしまうと警告する学者もいます。困っている人に寄り添う力、苦しい問題が起きても、そこにとどまり、そこから逃げない人が真に求められているのではないのでしょうか。

* 神戸の絆2005専務理事。

（まとめ・永野知己）

この事業は「阪神淡路20年事業」として、ひょうご安全の日推進県民会議の助成を受けて実施しています。

